

岩 波

西洋人名辞典

増補版

岩 波
西洋人名辞典
増補版

1981

岩 波 書 店

岩波 西洋人名辞典 増補版

© 岩波書店 1981

1956年10月16日 第1刷発行

1981年12月10日 増補版第1刷発行

編集 岩波書店編集部

発行者 緑川 亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋2-5-5

発行所 株式会社 岩波書店

電話 03-265-4111

振替 東京6-26240

Printed in Japan

増補版について

《岩波西洋人名辞典》を上梓したのは戦後なお間もない1956年のことである。それから四半世紀が過ぎた。その間、国際社会の変動はすさまじく、人事の転変もまた目まぐるしい。小社は、改修の機会を求めて、本書の重版をしばらく見合わせてきた。しかし、他に代るべき適当な類書が少ないためか、その復刊を希望する声は年々つのるばかりであった。そこで、このたび、編者篠田英雄先生の許諾を得て、《増補版》として再刊することにした。

この《増補版》には、組版上可能な範囲で最新の情報を盛り込むようつとめた。すなわち、

- 1) 初版刊行後25年間に登場した主要人物2300余名を選び、これを新たに収録して巻末に載せた。
- 2) 旧版既収の人物で、その後の事績いちじるしいもの200余名について、同じく巻末に補筆した。旧本文中の記述を修訂したものも若干ある。
- 3) 旧版収載時には生存していたが、その後死歿したもの約3000名に及ぶ。これらは判明するかぎり歿年月日を補った。
- 4) 人名のカナ表記について、学界ないし一般の慣用に従って、一部これを改めた。
- 5) ノーベル賞受賞者・各国元首の追補、巻末増補部分の索引は、最末尾に付録した。

編集の方針は旧版のそれをそのまま踏襲したが、最近の国際情勢の動向、学術研究の進歩に対応して、中近東・中東欧・アフリカ・中南米等に特に意を配った。

新収人名の選定をはじめ各項の執筆には多数専門諸家の御協力を賜わった。紙幅の制約や記載様式の整合をはかる必要から、編集部において若干の整理を加えさせていただいた。御寛恕を請うとともに厚く御礼申し上げる。なお、記述に過不及ありとせばもっぱら編集部の責任である。後日の補正を期したい。

現代生活はそのあらゆる分野において国際化が進み、何事につけて世界的視野が要求される時代である。本書がお役に立てば幸いである。

1981年12月

岩波書店編集部

序

《岩波西洋人名辞典 1932》は、第一次大戦後わが国と諸外国との国際的交渉がますます密接となるにつれ、簡便な西洋人名辞典を必要としてきた時代の社会的要求に応じて編集刊行され、当時わが国におけるこの種の最初の辞典として一応その役割を果たすことができた。そのうち世界情勢の著しい推移と、従ってまた人事の激しい変易は、改訂増補の必要を痛感させたのであるが、まもなく第二次大戦が勃発してわが国と海外との交通は殆んど断絶するに至り、さらに大戦終了後も暫くは彼我共に戦後の混乱に際会したため、数々の悪条件が重なり、着手を再三延引せざるを得なかった。とりわけその最も甚しい障害は諸外国における同時代人の消息を確知する途の杜絶したことであった。しかし戦後数年を経て上記の障害は漸次取除かれたのみならず、諸外国におけるこの種の事業の復興によって、信頼し得る資料が著しく増加したので、漸く宿年の計画に着手することに決し、1951年、篠田英雄氏に新たな《西洋人名辞典》の編集を委嘱し、同氏の立案と指導とにもとづいてこの事業を推進することとした。爾來6年、その間に当初予想されなかった各種の障害に遭遇しつつも幸いにこれを克服してここに完成を見るに至った。特にその間における篠田氏の没頭的な努力に負うところが多大で、小店の感謝に堪えないところである。

改修にあたっては、各種部門の学者、研究者の御協力を得て部門別の小委員会を設け、まず収録すべき人名の選択を行うとともに他方、編集部が別に数種の辞典に《交叉法 cross-method》を施して得た結果をもってこれを補い、総数2万3千余名を決定した。旧版1万3千2百余に比してほぼ1万名の増加である。次にこれらの人名についてそれぞれ最適の執筆者を求め、最近の資料に従っていちいち新たに稿を起し、旧版の面目を全く一新することを得た。

収容した人名は、古代から現代に至るまで人類の文化に何らかの寄与を致したところの人物を本幹として、これに多かれ少かれ歴史的意義を有する人物を配したほか、神話・聖書・伝説に現われるもの、著名な文学作品に描かれて爾來人間の類型と目されたものにも及んでいる。また地域的には、ヨーロッパ・南北アメリカ・中近東・アフリカおよび大洋州にわたり、さらにその文化的・政治的意義の重要性を顧慮して新たにインドを加えた。なお中近東の人名については、最近におけるわが国の近東学の長足の進歩に鑑みて、特に専門学者の

研究考証による最善の成果を取めた。また東洋、ことに日本および中国に渡来した主要な西洋人に格別の注意を払ったことは、わが国において使用される人名辞典として当然の処置であると信ずる。

西洋人名の発音のカナ写音による適確な表現は、日本語の特異な構造上むしろ絶望的な難事といってよい。そこで諸外国語についてそれぞれ一定の写音方式をたて、大部分はこれによって処理することを得たが、しかし検出の便を考慮して、わが国における慣用を踏襲したものもある。またこれに関連して、近代人の人名原綴にはアクセントを附することを試みた。これは近來西洋人名の耳から入る機会が多く、また口によって呼ぶ機会も増したので、できるだけ正確な発音を確かめる便りを供しようとする配慮に出たものである。

人名の各項に配当した行数は、全体の分量を考慮しつつ適宜に按排したが、記述の長短は必ずしもその人物の重要度に比例するものではなく、事績や資料の多寡によって決定した場合もある。また記事は、もっぱら公正な客観的記述を旨とし、政治的ないし党派的な評価にもとづく傾向性を避けた。

記載の方法は、ほぼ一定の形式に従ったが、一律な機械的統一に就かず、「使用しやすいこと」を基準として、全体にいわば有機的な統一を与えるに努めた。原稿には、記載の斉合をはかるために編集部においてまゝ添削を施した場合もあるが、これは統一上やむを得ざる扱いとして執筆諸家の御諒承を乞う次第である。

附録として、人名および地名の諸国語対照表、ノーベル賞受賞者表および各国元首表を附した。特に古代における中近東諸国の元首表は、最近の研究によって明らかにされた部分を含み、多大の学問的便益を提供するものと信ずる。

人名選択の妥当と記事の正確とは、この種の辞典の最主要事であるから、現存の条件下でできるだけ遺漏なきを期したつもりであるが、なお免かれ得なかった不備については、すべて編集部の判断の不適確に因る。これに関して幸いに大方の批判や教示を得るならば、いかに些細な示唆であってもこれを忽せにすることなく今後の補正に資する所存である。

1956年9月

岩波書店編集部

編 集 者

篠 田 英 雄

執 筆 者

孝俊徳三一正親忠郎治雄郎夫彦坪郎勉務重巖峯三雄彦二一雄雄郎一	純秀幹正常良太俊敏三幸陽三由守正英文重健正規太莊	倉川上山泉崎田松佐池敏内虎山吉保木在堀良田水広浦根中辺振莊	朝荒池石井今岩梅浦海大小小金香神久桑古小相沢篠清末杉関竹田辻	衛一郎謙治一一充郎雄通樹士誠雄馬順郎繁雄勉了喜雄明夫晃男郎児	兵信四幸清成一秀芳敬安竜二春珍辰達俊捷口江美岩健	仁喜原上井生山和一秀原沢門村我崎津林藤貴水井関父中々	木井田原上井生山和一秀原沢門村我崎津林藤貴水井関父中々	赤荒飯石井今岩牛浦榎太小小金嘉河久熊高小斎佐信清白杉関祖田千	由正祐助純豊吉隆四郎郎純彦一一一昇夫郎郎治雄夫雄郎勇彰宗道平	田公之教頼昌俊成朴太輝寿礼信寛一四栄重時南三健訪田坂耕	会阿栗石井井弥潮梅江太尾桂蒲川木熊神小斎佐鹿柴白杉諫曾田谷	夫了三六胤雄晃徹悟夫謙吉力夫正一義郎人雄雄哉郎雄夫弘孝克夫夫	重英賢業字良波利末敏正一惟一惟久茂正五千久寿宗	田原田川上上津間根上保畑塩間村合野清原玉松々柳田野木山野山辺	相芦栗石井井今岩梅江大大小小風上河紀熊蔵児小佐沢柴庄鈴杉関竹田
--------------------------------	--------------------------	-------------------------------	--------------------------------	--------------------------------	--------------------------	----------------------------	-----------------------------	--------------------------------	--------------------------------	-----------------------------	-------------------------------	--------------------------------	-------------------------	--------------------------------	---------------------------------

延郎勝治郎雄吉郎夫雄光行雄郎嶺介男雄助樹彦郎治穗典一
 正次英次一隆太義秀清重峯護高之治泰之治利太学瑞忠金
 郷新村瀬田々口健山瀬井積川田浦三富宅藤本沢上本田村辺
 東岡中成沼野橋林檜広藤穂前前松松三三武森矢山山横吉渡

夫元人男寿夫二夫二寛俊夫介学郎雄郎嘉光雄盛玄肇郎郎德三
 和康猿公長又齊武欣正達良恵三元一徳実路武美宗太五久洋
 田永野山田田木居武欣正達良恵三元一徳実路武美宗太五久洋
 寺徳中中西野波畑秀平福別本前増松三三武最矢柳山除吉和渡

人弥枝一紹祐康尚二昇二浩信次光穰和徹松郎剛助壽正夫一誠
 重久千健綾啓久久敬伸実信重隆谷福七重義之慶雅誓
 留井根屋織口村山水岡井原田嶋田安根輪山沼島田山識久辺
 都土中中錦野野畠速平福藤本前増松丸三三村柳八山雪吉和渡

衛啓二元夫一郎穰正穂司達雄郎郎文造樹穂郎勇一郎郎ひ夫男
 文玲俊素四鏡正晋宏重一太博得茂秋太竜次太秀武
 田山川村日上原島井井田野嶋上尾場上城堅下杉下本山沢辺
 角遠永中南野野畑早平深藤細前馬松的水都村柳八山山横米渡

增補版執筆者

和了男夫子清信明雄通義志樹理三雄秀巖孝彰治雄誠郎三男一美一夫彦敦夫成
 光英幾岑智友信一秀一健夏雄幸由木徹英英一興靜啓春榮迪俊典良
 山原川上田藤道島田場沢沢井野藤在堀藤々田田木根橋内中野井本野山永
 秋芦荒池石伊今牛榎太大小金龜岸工古小斉佐塩篠嶋鈴曾高竹田千箇寺直中西
 彰徹彬治友三子也洋子譽次泰実三攻隆俊夫彦郎郎衛新斌徹啓雄躬雄夫雄子雄
 井野崎忠博宙淳誠立康宏坂敬雅一清五一德敏忠惟和雅慶正
 赤浅尼池石市今上江大大尾加上神草桑小齋桜澤篠柴杉鈴高竹田遲辻寺内中西
 信剛正茂良三茂力三穂信治秀彦武敦也雄已勉男彦弘弘雄子史男典茂治夫明治
 吉公重雄隆美賀広定幸福久勝忠勝宜武隆悦外之安憲伸一
 山倉部高田垣上崎田島津部藤子村原原玉谷本藤野藤木野内野尾島盛村瀬
 清朝阿飯池板井岩内大大岡加金河北栗児小坂佐鹿柴新鈴高竹館丹辻寺富中成
 規文征勝一明強吉美子郎有郎亨和男郎彦郎光一二夫男敬雄征倫夫子衛元朗幸
 正光勝祐孝喜昌芳美二博英秀敏成邦醇健浩哲幸康正明三佐文康一紀
 柳山部賀田田野永川由保田田子合川原平松藤木賀倉木井橋田中田永川須
 春秋阿有池井稻弥内江大岡小金河北栗小小斎佐志芝白鈴高高武田辻角徳中奈

久子ル昇郎彦茂弥子三一男己郎力一
 敬典ト芳誠和音節優竜利正子金
 本本サ岡野川田畑城田杉崎住岡知辺
 根橋浜平星前町溝宮森森八山山吉良渡

サ郎子一美世郎一雄宏実稔之里尅浩樹
 フ三恂公一長四有征数昌萬敏春
 宮大田岡田間田之江村瀬田井内下井田
 二橋浜平藤本增水三百森安山山吉吉和

之男子穂郎興子文吾子一三郎肇泰作隆雄
 宏幸滉正次増三弘信公繁正孝耕義
 宮原場井野越木野塚月口司内下本田松辺
 二萩羽平平堀真水南望森門山山山吉若渡

夫二爾実男久次之美男子也司成静三載樹
 暢齊榮種輝信英孝吉洋達圭春昭時秀
 村居部田尾嶋村井田安野崎室上邊
 西波長原平堀前松三村森森矢山山吉李渡

凡 例

項目は原則として 1. 見出人名 2. 人名原綴 3. 生歿年、および元首にあっては在位年 4. 本文 5. 著書、作品、文献 の五要素から成るが、(5) はその全部或いは一部を欠くことがある。以下に記述方法について注意すべき事項を分類、記載した。

I 見出人名および人名原綴 II アクセントおよび分綴 III 排列 IV 生歿年および在位年 V 本文 VI 写音および写字 VII 略語表

I 見出人名および人名原綴

1. 見出人名は、原名の発音を重んずると同時に、できるだけ簡明な写音を用いた。そのため一定の方式 (VI) をたてて概ねこれに従ったが、他方我国における慣用をも顧慮して、一律な機械的統一を避け、検索し易い形にした場合も少くない。

2. 見出人名が地名その他によって規定されている場合は、その規定語を括弧 () に入れて添記した。

例：ゼノン (エレア Elea の)

3. 見出人名として、原綴の発音と著しく異なる慣用的呼称を採用した場合には、原綴に従う呼方を括弧 () に入れて並記し、かつこれを〈見よ項目〉(I, 14 参照) とした。

例：フルベッキ (ヴァーベク) Ver'beck

4. 見出人名に対応する人名原綴 (太字体) には、近代人においては家族名 (姓に相当する) をとり、これを見出人名に後置した。しかし中世以前の人名および君主名は西洋で慣用の呼び方に従った。

5. 呼名 (姓に対する名) の原綴はナミ活字体を用いて、太字体原綴の後に記し、その間をコンマで切った。しかしハンガリー系の人名は、姓・名の順に読むため、このコンマを附さない。

例 1：ゲーテ Goe'the, Johann Wolfgang von

例 2：(ハンガリー系) カジンツィ Ka'zinczy Ferenc

6. ラテン文字以外の人名原綴は別に方式 (VI) を定めて、ラテン文字に書換えた。

7. 人名原綴に、相異なる諸国語綴を対応させる場合には、綴の前にその国語名を示す略語 (VII, 1) を括弧 [] 内に記した。

例：アイソポス (希) Aisōpos (羅) Aesopus (英) Æsop (独) Äsop (仏) Esope

8. 人名原綴に別綴ある場合は、これを括弧 () に入れてその後並記した。

例：ケンペネル Kem'pener (Kempener)

9. 見出に対応する人名原綴のほかに筆名、全名、別名、前名、幼名、本名 (筆名その他が一般に通用されているため、これを本来の見出人名として採った場合)、通称、別称、称号、旧姓等を挙げるときは、これらの原綴の前にそれぞれ標記した。

例：マルコヴァ Marko'va, Alicia 本名：Lilian Alicia Marks

10. 人名原綴 (太字体) に二通りの読み方 (或いは綴) があり、一方の読み方 (或いは綴) が他方の読み方 (或いは綴) を含む場合には、省略し得る部分を括弧 () に入れて処理した。

例 1：ウェス(ト)コット West'cott

は、〈Westcott〉が〈ウェストコット〉とも〈ウェスコット〉とも呼び得ることを示す。

例 2: ホンテル(ス) Hon'ter(us)

は、〈ホンテル〉或いは〈ホンテルス〉とも呼ばれ、これにそれぞれ原綴〈Honter〉、〈Honterus〉が対応することを示す。

11. 帰化した人物の見出および原綴は、概ね帰化後の綴および呼び方に従った。
12. *Sir*, *Earl* (英), *Graf* (独), *Comte* (仏) 等の称号には、イタリック活字を用いて称号であることを明らかにした。
13. 人名原綴(太字体)に前置されたナミ活字の部分(アラビア語の〈ad〉, 〈al〉, 〈as〉, 〈ach〉, 〈az〉等; イタリア語の〈Il〉, 〈Fra〉等; スペイン語の〈El〉等)は見出においては無視される。但しアラビア語では、見出人名にもこの部分に相当する写音をナミ活字で表記してある。

例 1: (アラビア語) アッ・ズフリー az-Zuhri

例 2: (イタリア語) アンジェリコ Fra Ange'lico

例 3: (スペイン語) グレコ El Gre'co

14. 同一人物に二通りの呼び方があり、そのいずれも用いられている場合には、一般的な方を独立項目としてとり、他の呼び方を別に〈見よ項目〉として掲げ、記号〈→〉によって前者を参照すべきことを示した。

例: エル・グレコ → グレコ

15. 聖書の人名は、プロテスタントで現行の新・旧約聖書に拠った。従って見出は原綴と異なることがある。

例: イエス・キリスト (希) Iēsous Christos

16. 教皇名の見出は、カトリックにおける呼称法に従った。
17. 地名のカナ書きについては (V, 5-6) 参照。

II アクセントおよび分綴

1. 近代人の人名原綴には、原則としてアクセントを附したが、なお幾許か未詳のものについては、更に検討することにした。
2. アクセント記号〈'〉は、アクセントを有する音節の直後に附した。なお一音節のみから成るものにはアクセントを附さない(その場合フランス語の無音綴は一音節と認めない)。しかし人名原綴が二語から成り、〈-〉で連結されているものは、一音節でもアクセントを附した。
3. 分綴は、諸国語においてそれぞれ通用している分綴法に従った。

III 排 列

1. 見出人名の排列は五十音順に従った。
2. 捨てガナは、独立した一字として取扱った。
3. 中黒記号〈・〉は排列上無視するが、この記号のないものがあるときは、その次に排列した。
4. 長音は排列上無視したが、同位置に長音のないものがある場合には、その次に排列した。
5. 濁音、半濁音は排列上無視したが、同位置にあっては、清音、濁音、半濁音の順に排列した。
6. 人名原綴に二通りの読み方があり、これを (I, 10) に従って処理した場合には、省略を行わなかったものとして取扱った。

7. 見出人名の読みが同一で、これに対応する人名原綴を異にするものは、アルファベット順に排列した。

8. 同姓の人物が2名以上あり、アクセントの所在もまた同一の場合は、呼名のアルファベット順に排列し、1) 2) …の数字で区別した。

例：ウィルソン Wil'son 1) Alexander …
2) Charles Thomson Lees …

9. 同姓同名の人物は、(8)に従って一括したうえ年代順に排列し、更に呼び名原綴の右肩上に小数字 1, 2 …を附して区別した。

例：ウィルソン Wil'son …
9) James¹
10) James²

10. 同名の君侯は、取扱上独立に一括したが、更にその中で国に従って分類する必要がある場合には I) II) …に大別した。

11. アルファベット順の排列においては、以下の特殊な字母は、それぞれ附加記号を除いた普通の字母の次に置いた(大文字についても同じ)。

a: ä, å, á, à, â, ã, ä, ù, ã c: ċ, é, ç, d: ð, ð dh: dh e:
ë, é, è, ê, ë, ē, ē g: ġ gh: gh h: h, h, h i: i, i, i, i, i, i
kh: kh l: l n: ñ, ñ, ñ, ñ o: ö, ö, ö, ö, ö, ö, ö r: r, r
s: š, š, š, š t: t, t, t th: th u: ü, ú, û, ü, ü y: ý z: ž, ž, ž

IV 生歿年および在位年

1. 生歿年は、人名原綴或いはこれに関連する記載の次に置き、生年と歿年との間を記号〈〉で繋いだ。

例：カント Kant, Immanuel 1724. 4. 22–1804. 2. 12.

2. 生歿年について異説がある場合は、これを括弧()に入れて並記した。また生年もしくは歿年が、或る年間にありと推定される場合には次の書式に従った。

例：ダウハー Dau'cher, Adolf 1460(–65)–1523(24)

は、ダウハーが1460–65年間に生れ、1523 或いは1524年に歿したことを示す。

3. 生歿年が同世紀にある場合には、歿年については世紀を示す数字を省略した。

例：1729. 1. 22–81. 2. 15.

4. 現存の人物については、本文の書出しに〈現代〉という規定語を附した。

例：シュトックハウゼン Stock'hausen, Karlheinz 1928–

• 現代ドイツの作曲家。

5. 生歿年とも西紀前の場合は、生年の前に〈前〉を附し、歿年にはこれを省いた。

例：前 106–43.

6. 生年が西紀前で歿年が西紀後の場合は、歿年の前に〈後〉を附した。

例：前 63–後 14

7. 生歿年が正確でない場合は、それぞれの年の後に〈頃〉を附した。

例：1460頃–1527頃

8. 歿年のみ判明しているものについては、歿年の前に死亡記号 ⊥ を附した。

9. 元首の在位年の表記には記号〈/〉を用いた。

10. 古代オリエントの年代は、諸学者の立論の根拠に従ってそれぞれ甚しく異っている。近年マリ文書の発見によってハンムラビ時代の年代が著しく下げられることになっ

たのはその一例である。本書では概ね《Alexander Scharff, Anton Moortgat 共著: Ägypten und Vorderasien im Altertum, 1950》に準拠した。

V 本文

1. 神話、聖書、コーラン中の人物は、本文の初めに、括弧【 】を用いてそれぞれこれを標記した。
2. 括弧（ ）内の数字は西紀年を示す。その場合に、同世紀中の年が二つ以上現われるときは、世紀を示す数字を省いた。また西紀年に我国或いは中国の年号を配する必要があるときは、これを並記した。
3. 本文中に出てくる人名で、独立項目として存するものには、記号〈 〉を附し、存しないものは括弧（ ）内に原綴を記した。これに生歿年或いは在位年を附する場合には、(IV)の相当項の記載方法に従った。なお重要な引用人名は索引に掲載した。
4. 特殊な名詞、形容詞および引用句等は括弧〈 〉で囲んだ。
5. 地名のカナ書きは、原則としてそれぞれの国における呼び方に従ったが、我国の慣用に依った例も少くない。なお主要な地名については、附録の〈地名対照表〉を参照。
6. ギリシア語の地名をラテン文字に書換える場合には〈e〉〈o〉上の長音記号を省略した。
7. 著書名は括弧《 》に、また新聞紙名、雑誌名、叢書名等および芸術作品名は括弧〈 〉内に記した。
8. 著書の出版年の左肩上に附した小数字は版数を示す。
9. 芸術作品の所在地を示す場合には括弧（ ）を用いた。
10. 文献は最も主要なものだけに止めた。

VI 写音および写字(ラテン文字化)

外国人名のカナ写音は、原綴の発音を重んじつつ日本語として無理のない表現を求め、ため、主要な諸国語について一定の写音方式をたてて、概ねこれに従った。しかしこの問題は、日本語が諸外国語と構造を異にするところから、一般的にもまた多くの個々の場合についても、特殊な困難を含んでいるため、所定の方式によって一応明確な理路を通し得たもののおお精究の余地を剩すかと思うので、今後も大方の協力を得て、我国における外国人名の普遍的な写音法の定立を期したい。なおこの方式は、我国における慣用的な呼び方に従うもの、および原綴が固有名詞として特別の発音を有するものについては適用されない。因みに地名の写音も概ね本方式に従った。

1. 下記の方式の適用範囲は、本辞典に含まれている人名および地名に限った。
2. 原綴にはこれに相当するカナ書きを括弧〈 〉に記入、対応させた。またカナ書きで表わすことを不便とするものにはラテン文字を当てたが、その場合には我国のローマ字(ヘボン式)の発音に従う、なおラテン文字による表記が子音の場合は、これに適宜の母音を附して同上のローマ字式発音に従うものとする、例えば(k)はカ行になり得ることを示す。
3. 原綴の発音がローマ字式発音で処理し得るものは、特に記さない。但し〈l〉はラ行、〈v〉は〈ヴ〉として取扱う。
4. 写字はヨーロッパで一般に用いられている方式に従った。
5. 諸国語の写音方式は次の順序で排列した。

1. 英語
2. ドイツ語
3. フランス語

- | | | |
|-------------|---------------------------|-------------|
| 4. イタリア語 | 5. スペイン語 | 6. ポルトガル語 |
| 7. オランダ語 | 8. デンマーク語 | 9. スウェーデン語 |
| 10. ノルウェー語 | 11. ハンガリー語 | 12. フィンランド語 |
| 13. ボーランド語 | 14. セルボ・クロアート語 (ユーゴスラヴィア) | |
| 15. チェコ語 | 16. ルーマニア語 | 17. ラテン語 |
| 18. ロシア語 | 19. ギリシア語 | 20. アラビア語 |
| 21. エジプト語 | 22. フェニキア語およびヘブライ語 | |
| 23. サンスクリット | | |

1. 英語

- 1) a: 〈ア〉; 〈エー〉; 〈オ〉 例: Ad'ams アダムズ; Shake'speare シェークスピア; Watt ウォット
- 2) ai: 〈エー〉, 語尾では〈イ〉 例: Craig クレーグ; Cham'berlain チェンバリン
- 3) air: 〈エア〉 例: Caird ケアド; Sin'clair シンクレア
- 4) al, all: 〈アル〉; 〈オール〉 例: Al'bert アルバート; Dal'ton ドールトン; All'ston オールストン
- 5) ar: 〈アー〉; 〈エア〉 例: Dar'by ダービー; Mar'y メアリ
- 6) aw: 〈オー〉 例: Law'son ローソン
- 7) ay: 〈エー〉, 語尾では概ね〈イ〉 例: May'er メーヤー; Macau'lay マコーリ
- 8) borough, burgh: 〈バラ〉 例: Marl'borough マルバラ; Rox'burgh ロクスバラ
- 9) ca: 概ね〈ケー〉; 〈カ〉; 時に〈キャ〉 例: Ca'ble ケーブル; Can'non カノン; Catt キャット
- 10) e: 〈エ〉; 〈イー〉, 〈イ〉, 時にサイレントとなる. 例: Dell デル; Macdon'ell マクドネル; Ste'vens スティーヴンス
- 11) ea: 〈エ〉, 〈エー〉; 〈イー〉 例: Read'ing レディング; Ea'kins エーキンズ; Ea'ton イートン
- 12) ear: 〈アー〉; 〈イア〉, 〈イアー〉 例: Ear'ly アーリー; Pear'son ピアソン; Beard ビアード
- 13) ee: 〈イー〉, 〈イ〉 例: MacGee' マギー; Blakes'lee ブレークスリ
- 14) ei: 〈アイ〉; 〈エー〉; 〈イー〉, 〈イ〉 例: Ei'senhower アイゼンハウアー; Leigh'ton レートン; Reid リード; Ray'leigh レーリ
- 15) er: 〈アー〉, 〈ア〉 例: Er'nest アーネスト; Jef'ferson ジェファソン
- 16) ew: 〈ウー〉; 〈スー〉, 〈ユ〉 例: Lew'is ルーイス; New'ton ニュートン; Stew'ard ステュアート
- 17) ey: 〈アイ〉; 〈エ〉, 〈エー〉; 〈イー〉, 語尾では〈イ〉 例: Feyn'man ファインマン; Rey'na レーナ; Sey'mour シーモア; Pu'sey ビュージ
- 18) ga: 概ね〈ゲー〉, 〈ガ〉; 時に〈ギャ〉 例: Gates ゲーツ; Gar'rick ガリック; Gal'lup ギャラップ
- 19) i: 〈アイ〉; 〈イ〉 例: Fin'er ファイナー; Pitt ビット
- 20) ie: 〈イー〉, 〈イ〉, 特に語尾では〈イ〉 例: Priest'ley プリーストリ; Pet'rie ペトリ
- 21) m: b, m, p の前では〈ン〉, その他は〈ム〉 例: Cambridge ケンブリジ (地名); Ram'say ラムジ 例外: Drum'mond ドラモンド
- 22) Mac, Mc: 促音を用いない. 例: MacAr'thur マカーサー; Mckim' マキム; Mcken'na マケナ

- 23) ng: 鼻音となるが, d, t の前では g を発音しない. 例: 'Hem'ingway ヘミング
* ウェー; Wellington ウェリントン
- 24) o: <オ>, <オー>; <ア> 例: Mor'ris モリス; Ten'nyson; テニソン; Bode ボー
ド; Monk マンク
- 25) oo: <ウ>, <ウ>; <オー> 例: Poole プール; Hood フッド
- 26) or: <ア>; <オー>, <オア> 例: Words'worth ワーズワース; Morse モース;
More モア
- 27) ou: <ア>; <アウ>; <ウ>; <オー>; <ユー> 例: Doug'las ダグラス; Hous'man
ハウスマン; Gould グールド; Moul'ton モールトン; Hous'ton ヒューストン
- 28) ow: <アウ>; <オー> 例: Dow ダウ; Low'ell ローエル
- 29) owar, ower, owor: <アワー> 例: How'ard ハワード; Pow'ers パワーズ
- 30) qu: <ク> 例: Queen クイーン; Squire スクアア
- 31) s: 語尾では cs, cks, ks, ps, ts を除き概ね<ズ> 例: Hobbes ホッブズ; Riggs
リッグズ
- 32) u: <ア>; <ウ>; <ユ>, <ユー> 例: Drum ドラム; Stu'art スチュアート; Tu'dor
チューダー
- 33) ur: <ア>; <ユア> 例: Burke バーク; Scrip'ture スクリプチュア
- 34) wh: <ホ> 例: Whit'man ホワイトマン; White ホワイト 例外: Whew'ell
ヒューエル
- 35) y: <ヤ>; <アイ>; <イ>, 特に語尾では<イ> 例: York ヨーク; Wyld ワイルド;
Ten'nyson テニソン; Hen'ry ヘンリ

2. ドイツ語

- 1) ä, ae: <エ>, <エー> 例: Käst'ner ケストナー
- 2) äu: <オイ> 例: Bäü'mer ボイマー
- 3) ay: <アイ> 例: Hay'nau ハイナウ
- 4) b: 語尾では<プ> 例: Ja'kob ヤーコブ
- 5) c: e, i の前では<ツ>, 他は<ク>
- 6) cher: 語尾では<ハー> 例: Schlei'ermacher シュライエルマッハー
- 7) chs: <クス> 例: Sach'sen サクセン(地名)
- 8) ck: <ク> 例: Kro'necker クローネッカー
- 9) cs, cz: <チ> 例: Czer'ny チェルニー 例外: Czol'be ショルベ
- 10) d, dt: 語尾では<ト> 例: Kon'rad コンラート; Hum'boldt フンボルト
- 11) ei, ey: <アイ> 例: Hei'ne ハイネ; Mey'er メイアー
- 12) er: 語尾でのみ<アー>, 語頭および語中では<エル> 例: Schil'ler シラー; Er-
langen エルランゲン(地名)
- 13) eu: <オイ> 例: Euc'ken オイケン
- 14) g*: 語尾では<グ> 例: Ge'org ゲオルク
* ig, ng についてはそれぞれの項を参照。
- 15) gh: <グ> 例: Se'ghers ゼーゲルス
- 16) gk: 語尾では<ク> 例: Cro'negk クローネック
- 17) gny: 語尾では<ニー> 例: Sa'vigny サヴィニー

- 18) h: 語中では概ねサイレント, またその前の母音は長くなる. 例: Jahn ヤーン
- 19) ie: 〈イー〉, 〈イエ〉 例: Marie' マリー; Mari'e マリーエ
- 20) ig: 語尾では〈イヒ〉 例: Kö'nig ケーニヒ
- 21) j: 〈y〉 例: Jo'seph ヨゼフ
- 22) m: b, m, p の前では〈ン〉 例: Som'bart ソンバルト 例外: Stamm'ler シュ
タムラー
- 23) ng: 鼻音となる. 例: Les'sing
- 24) ö, oe: 〈エ〉, 〈エー〉 例: Kör'ner ケルナー; Goe'the ゲーテ
- 25) pf: 〈プフ〉 例: Kempf ケンプフ
- 26) qu: 〈クウ〉 例: Quantz クヴァンツ
- 27) s: 語の初めにあって母音を伴うとき, 前後に母音があるときは概ね濁音となる.
例: Seeckt セークト
- 28) sp, st: 語頭ではそれぞれ 〈shp〉, 〈sht〉 例: Spee シュペー; Strauss シュト
ラウス
- 29) ß: ss と綴り, 発音は〈s〉 例: Preussen プロイセン(地名)
- 30) tsch, tzscht: 〈チ〉, 〈チュ〉 例: Nietz'sche ニーチェ; Kötzsch'ke ケチュケ
- 31) tzy: 〈チ〉
- 32) ü, ue: 〈ユ〉, 〈ユー〉 例: Mül'ler ミュラー; Ü'berweg ユーベルヴェーク
- 33) v: 〈f, フ〉, しかし前後に母音のある場合はしばしば有声音となる. 例: Vier'kandt
フィールカント; Bee'thoven ベートーヴェン
- 34) w: 〈v, ヴ〉 例: Wag'ner ヴァグナー
- 35) y: 〈イ〉, 〈イー〉, 語頭, 語中で子音に続くときは〈ユ〉, 〈ユー〉
- 36) z: 〈ts〉 例: Zinzendorf ツィンツェンドルフ 例外: Leip'zig ライプチヒ(地
名); Pestaloz'zi ベスタロッツ
- 37) zsch: 〈ch〉 例: Zschok'ke チョッケ

3. フランス語

- 1) a, à, â, as, at: 〈ア〉, 〈アー〉 例: Marat マラー; Vaugelas ヴォージュラ; Châte-
let シャトレ
- 2) ai, ay: 〈エ〉, 〈エー〉 例: Aimé エメ; Taine テーヌ
- 3) aim, ain, an, and, ans, ant: 〈アン〉 例: Champlain シャンプラン; Arland
アルラン
- 4) air, aire: 〈エール〉 例: Baudelaire ボードレー
- 5) ard: 〈アール〉 例: Bonnard ボナール
- 6) au, ault, auldt, aux: 〈オ〉, 〈オー〉 例: Daunou ドヌー; Bidault ビドー; Ar-
naudt アルノー
- 7) c: a, o, u の前では〈k〉; e, i, y の前では〈s〉 例: Calonne カロンヌ; Curel
キュレル; Cyrano シラノ; Cécile セシル
- 8) ç: 〈s〉 例: François フランソワ
- 9) ch: 母音の前では〈sh〉, 語尾(外来語)では概ね〈k〉 例: Chavannes シャヴァ
ンヌ; Bloch ブロック
- 10) e: 語尾では概ね無音, 重子音の前では〈エ〉 例: Antoine アントアヌ; Estienne
エティエンヌ; Yvette イヴェット